

横浜 みなと 新聞

No.259

●神奈川新聞横浜みなと支局
横浜市中区海岸通1-1-4
✉yokohama-minato@kanagawa-np.co.jp

文化の秋、確かな重みのある文字に触れてみたいと、ある仕事場を訪ねた。活版印刷に使う金属活字を鋳造する築地活字(横浜市南区)。大小、書体もさまざまな活字が棚に並ぶ空間で、職人は希少な技を守り、経営者は新たな価値を探っていた。(山本 昭子)

横浜・南区 鋳造の現場探訪

金属活字 広がる魅力

10月の平日午前、半袖姿の大松初行さん(78)が鋳造機に向き合っていた。外は肌寒いが、ここは汗ばむほど。活字の原料である鉛などの合金を約400度の熱で溶かすからだ。

活版印刷は、饅頭文字が突如とした活字を一字ずつ組み合わせる版で刷り上げる。1919年創業の同社は全国でも数少ない活字鋳造を手がける会社で、大松さんはこの道約50年の職人。原料を母型という型に流し込み、一瞬で固めて四角柱の活字に仕上げる。

8月には市の「横浜マイスター」に選ばれた腕利きだが、文字の片寄りなく美しく仕上げるための機械の微調整は不可欠。「いまだに(初めて)分かることがある。簡単なようで難しい」と話す。

活版印刷はかつて印刷の主だった。だが、オフセット印刷やデジタル化が進み、同社によると、活字鋳造の現役職人は全国でも10人に満たないとみられる。

「常に新しい人が入ってきていろいろ教えてくれる。発見がありますよ」。5代目の平工希一さん(63)は、活版印刷のプロ向けだけ

でなく、新たな顧客層の開拓にも力を注いできた。ウェブで情報を発信し、鋳造見学会も重ねた。独特の文字の風合いを求めるデザイナーや、趣味でレーザーに刻印する人、組まずにスタンブのように楽しむ人……。活字を求める人の裾野の広がりは、近年の築地活字を支えてきたという。

だが、新型コロナウイルス禍は容赦なかった。名刺需要の減少を「歴史があり、残さなさいいけ」と、背景に同社の売り上げは落ち込み、このまま技術を途絶えさせてはいけないと、昨夏にクラウドファンディングに挑戦。活版印刷の名刺やレーザー製品、鋳造を学ぶコースなどを返礼に資金を募ると、目標の5倍以上集まった。今春には他企業とタッグを組み、活字を使った立体カレンダーも作製。印刷だけでなく、モノとしての可能性も見据える。

「歴史があり、残さなさいいけ」と、背景に同社の売り上げは落ち込み、このまま技術を途絶えさせてはいけないと、昨夏にクラウドファンディングに挑戦。活版印刷の名刺やレーザー製品、鋳造を学ぶコースなどを返礼に資金を募ると、目標の5倍以上集まった。今春には他企業とタッグを組み、活字を使った立体カレンダーも作製。印刷だけでなく、モノとしての可能性も見据える。

金属活字を使った立体カレンダー。木枠に活字をはめ込んで使い、組み換えも可能だ。



基礎コースの女性

ものづくりに感動

夫とデザイン事務所を営む堀ひとみさん(36)は千葉県でも活字に魅了された一人。1月から6回ほど築地活字に通い、活字鋳造の技術を学ぶ。

元々、文房具が好きで、活版印刷を体験する催しにも参加してきた堀さん。コンピュータの画面上で扱う文字は調整が自在だが、活字は物体としての制約があることと独特の美しさがあると感じてきた。「活字が生まれるところを直接見たい」と、同社の「活字鋳造・基礎コース」に応募。現在は堀さんを含め4人が、本職の傍ら同社に通う。

堀さんが実感しているのはものづくりの魅力。鋳造したての活字に宿る熱、機械と一体化したかのような大松さんの手さばきには「毎回感動する」。学んだ技術を、自身が行けるレーザーセットなどに取り入れたという。

(山本 昭子)



「みなと」と並べた金属活字



5代目の平工さん

希少な技、新たな価値へ



職人の大松さん(右)から鋳造を学ぶ堀さん